

文法性判断テストによる日本語学習者のシテイルの習得研究

—「結果の状態」用法を中心に—

簡 卉 雯

要 旨

「結果の状態」のシテイルの習得に、状態変化と位置変化という主体変化動詞の意味特徴による影響があるかどうかを検討するために、中国語母語話者を対象に文法性判断テストを実施した。調査の結果、位置変化動詞は状態変化動詞より得点が低くなっており、習得過程に「U字型発達曲線」の傾向が観察された。また、位置変化動詞の使用に動詞の意志性の有無による影響も見られた。こうした影響は主体変化動詞の意味特徴、教材や教師からの影響とインプットの頻度により生じた可能性があると推測される。

キーワード： アスペクト／シテイル／結果の状態／状態変化／位置変化

1. はじめに

日本語アスペクト形式の1つであるシテイルにはさまざまな用法があり、その中で「動作の持続」（例：子供が公園で遊んでいる）と「結果の状態」（例：花瓶が割れている。）の2つが中心的な用法とされている（吉川1971;寺村1984）。日本語母語話者の日常会話では、シテイルの「結果の状態」用法は「動作の持続」用法より多く使用されているという報告がある（西・白井2004）。しかしながら、第2言語としての日本語のシテイルの習得では、「結果の状態」用法は「動作の持続」用法に比べ、どの言語を母語とする日本語学習者にとっても、比較的習得が難しいものであることが指摘されている（小山2004；菅谷2004；Sugaya & Shirai 2007）。習得が困難になる要因について、先行研究は母語からの転移、動詞語彙的アスペクト、文法的アスペクトなど様々な側面から説明しているが、まだ明らかにされていないところも多い（黒野1995；Shirai 2002；小山2004；菅谷2004；許2005；塩川2007）。

シテイルの「結果の状態」用法は瞬間性を持つ主体変化動詞¹と結びつくことにより現れる。主体変化動詞として一括される動詞の中には、「壊れる、死ぬ」のような「状態変化動詞」と「行く、来る」のような「位置変化動詞」がある（鷲尾・三原1997；工藤1995）。状態変化動詞は主体の内的属性の変化を表す動詞であるのに対して、位置変化動詞は主体の物理的な位置の変化（即ち移動）を表す動詞である（工藤1995；影山1996、2001；川野2003）。主体変化動詞の意味特徴が「結果の状態」用法の習得に影響を与えているのか、日本語学習者がこの2種類の動詞を区別して使用しているのかに関しては、検討する余地がある。しかし、今までこれと関連する研究はまだ少ない。そこで、本稿では、中国語を母語とする学習者を対象に、文法性判断テストを実施し、主体変化動詞の意味がシテイルの「結果の状態」用法の習得に影響するかどうかを検証し、さらにその理由を考

察する。

2. 「結果の状態」用法のシテイルと「状態・位置変化動詞」の関わり

「結果の状態」用法のシテイルと結びつく主体変化動詞には、「壊れる、割れる、死ぬ」のような状態変化動詞と「行く、来る、出る」のような位置変化動詞がある（工藤1995、2002；鷺尾・三原1997）。主体変化動詞は「主体の観点から、変化を捉えているものであり、従って、運動過程が必然的に尽きて結果状態が成立する時間限界のある「内的限界動詞」である（工藤1995：84）。そのうち、状態変化動詞は主体の内的属性の変化を表すものである一方、位置変化動詞は主体の存在位置の変化を表すものである（影山1996、2001；川野2003）。状態変化動詞はシテイルと結びつき、動作・作用が瞬間的に終わり、主体に生じた変化の結果としての「状態」が残ることを示す。例えば、「花瓶が割れている」の「割れている」は花瓶の内的属性に状態の変化が生じ、その変化の結果が残ることを表す（鷺尾・三原1997）。

それに対して、位置変化動詞はシテイルと結びつき、動作・作用が完了した時に、主体の空間的な移動に伴う「位置」変化の結果を表す。例えば、「田中君が今、研究室に来ている」の「来ている」は「状態変化」を表すのではなく、主語がある場所から研究室に移動することを示す（鷺尾・三原1997）。従って、位置変化構文には着点への移動・存在を標示する二格と、出発点を標示するカラ格が現れる。

位置変化動詞と状態変化動詞の両者は、時間的な性質を持つアスペクト形式であるシテイルと結びつき、ある時間軸の中で、ある現象が発生し、その変化の結果が残ることを表す。しかしながら、「位置変化動詞＋ている」は主体の存在位置の変化結果を表すことで、時間的な性質のほか、空間的な性質も併せ持つ。一方、「状態変化動詞＋ている」はそのような空間的な性質は見られない（簡2012）。日本語学習者が「結果の状態」用法のシテイルの習得過程において、この2種類の変化動詞の意味特徴に影響され、区別して使用しているのか、検討の余地があると考えられる。

日本語学習者を対象に、「結果の状態」用法のシテイルの習得と変化動詞の意味特徴の関連を考察した研究は、陳（2009）と簡（2012）がある。陳（2009）は、中国語を母語とする学習者を対象とし、「結果の状態」用法のシテイルと「ある／いる」の使い分けに焦点を置き、質問紙調査を実施した。分析の結果、学習者は位置変化動詞（陳（2009）の用語は「移動動詞」）と結びつく「結果の状態」のシテイルの代わりに「ある／いる」を使用する傾向があることが分かった。中国語話者は「お客さんが来ている」、「財布が落ちている」などの代わりに「お客さんがいる」、「財布がある」を使用していることが報告されている（陳2009；庵2010）。

簡（2012）では、中国語母語話者による3.5年間の縦断的な作文データを用い、「結果の状態」用法の習得過程に焦点を当て、結びつく変化動詞の種類から学習者の中間言語とその変化を分析した。分析の結果、「位置変化動詞＋ている」は「状態変化動詞＋ている」より習得しにくいことを指摘している。また、学習者の中間言語は変化動詞の意味特徴の違いによる影響があることを報告している。過剰使用パターン「ル→誤用のテイル」と非使用のパターン「誤用のル」は状態変化動

詞と位置変化動詞の両方に観察された。一方、過剰使用のパターン「テクル→誤用のテイル」は主に位置変化動詞と、非使用のパターン「誤用のタ」は主に状態変化動詞とともに出現した²。こうした結果について、簡（2012）は結びつく変化動詞の意味特徴の違いに起因する可能性があるとして述べている。

しかし、簡（2012）の調査は、学習者の中間言語の発達プロセスを観察するため、6名の学習者を対象とし、質的な側面に注目する縦断的な研究である。よって、調査で用いられた学習者数は6名のみであるため、得られた結果が一般化できるかどうかは不明である。学習者のデータをレベル別に大量に収集し、統計分析による客観的な検定を行い検証する必要がある。

以上の点を踏まえ、本研究では、文法性判断テストを用い、中国語母語話者を対象に、主体変化動詞の意味がシテイルの「結果の状態」用法の習得に影響を与えるかを再検討する。

また、状態変化動詞と位置変化動詞に関して、本稿では簡（2012）の分類と定義に基づき、状態変化動詞は主体の内的属性の変化を表す動詞とし、位置変化動詞は主体の物理的な存在位置の変化（即ち移動）を表す動詞と定義した。そして、位置変化動詞であるかどうかについて、着点への移動・存在を標示するニ格と、出発点を表示するカラ格がその変化構文に現れるか、または、許容するかを1つの判断基準とする。具体的には、状態変化動詞として「溶ける、切れる、割れる、壊れる、死ぬ」など、位置変化動詞として「入る、（～から～に）浮かぶ、（～が～から）剥がれる、（～が～に）付く」などの動詞が挙げられる。

3. 調査

3. 1 調査対象者

調査は「結果の状態」の用法の習得に最も苦労すると指摘されている中国語母語話者を対象に、文法性判断テストを行った。被験者は、台湾のある大学の日本語科に在籍する中国語母語話者である。2年生、3年生、4年生と修士課程の日本語学習者の中で、それぞれ任意に1クラスを選んで、担当の先生の許可を得た上、授業中に文法性判断テストを実施した。その後、日本語能力試験（JLPT）の認定結果を用いて、調査対象となるN1～N4の合格者を抽出して、N1合格者（36名）、N2合格者（48名）、N3合格者（60名）、N4合格者（48名）の4つのグループに分けた（以下ではこの4つのグループをそれぞれN1、N2、N3、N4と呼ぶ）。また、統制群として、日本の大学に在籍する日本語母語話者50名にも文法性判断テストを実施した。学習者データの収集方法と同様に、担当の先生の許可を得た上、授業中に実施した。

3. 2 調査方法

「結果の状態」用法のシテイル使用における動詞種類の影響を検証する。そのため、被験者に動詞の種類の違いに気付くことがないように、状態変化動詞をAタイプとし、位置変化動詞をBタイプとする2タイプの文法性判断テストを作成した。各タイプのテストは調査対象の動詞6問とダミー問題（調査対象外の動詞）26問の計32問からなる。調査対象の日本語学習者及び日本語母語話

者のほぼ半数にはAタイプ、残りの半数にはBタイプの文法性判断テストを実施した。テストの解答に時間制限は設けなかった（平均所要時間は約40分）。文法性判断テストの構成の概要は表1の通りである。また、調査を行う際に、テストの内容に対して、語彙が不明な被験者に中国語で説明を行った。

表2は調査文例と回答例である。調査を実施する際に、被験者に、文法的に正しいものを(◎)、文法的に正しいように見えるが、自信がないものを(○)、文法的に誤っているように見えるが、自信がないものを(△)、文法的に誤っているものを(×)と、全ての()に記号を記入してもらった。1つの質問に同じ記号を2回以上使用して回答しても認めることにした。ただし、被験者の回答の中で、データとして採用するのは、表2の(1)と(2)に示したシテイルの項目のみである。また、シテイルの項目の回答について、4段階評定で点数化して分析を行った。具体的に、◎を4点、○を3点、△を2点、×を1点として、点数化して得点を計算した。

表1：文法性判断テストの構成の概要

		Aタイプ	Bタイプ
動詞の種類		状態変化動詞	位置変化動詞
調査対象の動詞		6問	6問
調査対象外の動詞		26問	26問
被験者数	N 4合格者	20名	28名
	N 3合格者	30名	30名
	N 2合格者	23名	25名
	N 1合格者	21名	15名
	日本語母語話者	26名	24名
出題された動詞		咲く、閉まる、壊れる、着る、始まる、積もる	上がる、倒れる、行く、来る、浮かぶ、落ちる

表2：調査文例と回答例

<p>(1) 家のクーラーが_____ (壊れる) ので、とても暑い。 (×) 壊れる (○) 壊れた (◎) 壊れている</p> <p>(2) 「すみません。田中さんに会いたいんですが。」 「佐藤さんですか。田中さんは15分前から、先生の部屋に_____ (行く)。」 (×) 行きます (△) 行きました (◎) 行っています</p>
--

文法性判断テストの調査文は以下の通りである。

(1) 調査文 A タイプ：状態変化動詞

- 夜中に子供が熱を出して、_____ (閉まる) 小児科のドアを叩いて「お願いします！見てください」という場合がありますよね。

- () 閉まる () 閉まった () 閉まっている
2. 学生たちはみんな同じようなものを_____ (着る)。決まったジーパンにシャツだ。こんな格好も学生だからできるのだ。
- () 着る () 着た () 着ている
3. 山梨県で百合が600万本_____ (咲く) というニュースがあったのですが、場所が確認できませんでした。
- () 咲く () 咲いた () 咲いている
4. 家のクーラーが_____ (壊れる) ので、とても暑い。
- () 壊れる () 壊れた () 壊れている
5. 年賀状の受付が_____ (始まる) ので、すでに出してしまった人がいるかもしれない。
- () 始まる () 始まった () 始まっている
6. 地面には雪は一尺くらい_____ (積もる)。
- () 積もる () 積もった () 積もっている

(2) 調査文 B タイプ：位置変化動詞

1. 「すみません。田中さんに会いたいんですが。」
- 「佐藤さんですか。田中さんは15分前から、先生の部屋に_____ (行く)。」
- () 行きます () 行きました () 行っています
2. ここに_____ (来る) 方は、どんな趣味をお持ちでしょう？
- () 来る () 来た () 来ている
3. 午前四時半前に起きると、牛舎は牛の足元まで水位が_____ (上がる)。
- () 上がる () 上がった () 上がっていた
4. 子供たちは公園に、_____ (落ちる) 栗の実を拾って遊んだ。
- () 落ちる () 落ちた () 落ちている
5. 道で_____ (倒れる) 人がいたら、救急車を呼んであげた方がいいですか。“多分”、酔っ払って寝ている状況もありますが…。
- () 倒れる () 倒れた () 倒れている
6. まるで桜の花びらが_____ (浮かぶ) ようなお風呂。
- () 浮かぶ () 浮かんだ () 浮かんでいる

表3は回答に使用する記号と4段階評定の点数との対照表である。調査文のテスト評価段階に4段階法を採用する理由については、偶数の段階分けによって、質問文が文法的に正しいか、誤っているかをそれぞれ2段階に分けることで、学習者の回答を明確的に判断することが可能であると考えた。

表3：回答に使用する記号と4段階評定の点数との対照

	記号	点数
文法的に正しいもの	◎	4
文法的に正しいように見えるが、自信がないもの	○	3
文法的に誤っているように見えるが、自信がないもの	△	2
文法的に誤っているもの	×	1

4. 結果

以下では、まず、日本語学習者の使用に注目し、計算したシテイル項目の得点でグループ間の差を検討したあと、日本語母語話者を含むシテイル項目の「◎」の数を集計し、グループごとに選択率を比較する。それから、状態変化動詞と位置変化動詞における動詞別の得点を比較し考察していく。

4. 1 動詞の種類と日本語レベルによるシテイル使用の差

4. 1. 1 状態変化動詞と位置変化動詞の得点

被験者の日本語習得レベル別に状態変化動詞と位置変化動詞の得点を比較する。集計した得点から平均値と標準偏差を計算して表4に示した。日本人母語話者を除き、どのグループも状態変化動詞の平均値は位置変化動詞より高くなっていることが分かった。また、状態変化動詞の平均値は日本語レベルの上昇につれ、進んでいくのに対して、位置変化動詞は日本語レベルがN4からN3に上がると、平均値が一度下がって、N2になってからまた上がっていく傾向が見られた。

表4：被験者のレベル別の平均値と標準偏差

		N 4	N 3	N 2	N 1	日本人
状態変化動詞	M	2.93	3.06	3.30	3.63	3.87
	SD	1.11	1.12	1.01	0.84	0.52
位置変化動詞	M	2.79	2.56	2.77	3.14	3.94
	SD	1.12	1.22	1.20	1.21	0.23

続いて、日本語学習者の使用状況について、「状態／位置変化」という動詞の種類の変因と日本語レベルの変因で、2変因（状態／位置変化動詞×日本語レベル）の分散分析を行った。その結果、動詞の種類 ($F [1, 1138] = 36.560, p < .01$) と日本語レベル ($F [3, 1138] = 12.927, p < .01$) は1%水準で有意であった。交互作用は有意ではなかった。日本語レベルについて、テューキーのHSD検定による多重比較を行ったところ、N1とN2、N3、N4の間で1%水準で有意差があった。他のレベル間には有意差がなかった。

以上の結果から、日本語学習者によるシテイルの使用は動詞の種類と日本語レベルにより異なることが分かった。状態変化動詞と位置変化動詞の使用を比較した結果、全体的にどちらも日本語レ

ベルの上昇に従い、得点が増える傾向が確認された。また、位置変化動詞は状態変化動詞より平均値が有意に低いと言える。

4. 1. 2 シテイル項目の使用状況

シテイル項目の「◎」の数を集計して、動詞の種類別にグループごとに選択率を計算して比較する。図1は日本語学習者と日本語母語話者の選択率を示したものである。

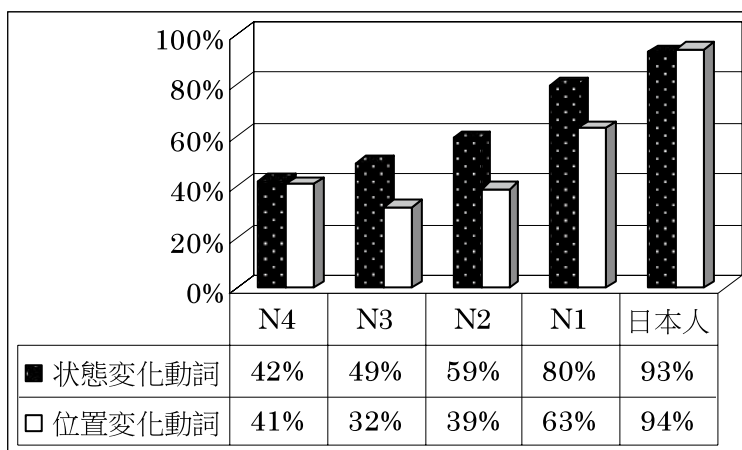


図1：質問文におけるシテイルが「◎」の選択率

状態変化動詞と位置変化動詞において、日本語母語話者の選択率ではそれぞれ93%と94%である。それに対して、各レベルの学習者の使用には、動詞の種類による偏りが観察された。位置変化動詞の選択率は状態変化動詞より低かった。また、状態変化動詞の選択率に関しては、学習期間が長くなるにつれて、どんどん増えていく傾向があった。一方、位置変化動詞の選択率は、N3で一時落ちて、N2では少し上がってきたが、N4より低かった。よって、U字型を描くという「U字型発達曲線」(Kellerman 1985)の傾向が観察された。N1では選択率は63%に上昇するが、N2の状態変化動詞の選択率(59%)とあまり差がない数字である。

4. 2 状態変化動詞における動詞別の比較

続いて、各状態変化動詞の得点を比較する。動詞別の得点は表5のようになった。

表5：状態変化動詞における動詞別得点

	咲く		閉まる		壊れる		着る		始まる		積もる	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
N 4	3.30	1.03	2.65	1.08	2.80	1.24	3.40	0.88	2.20	1.10	3.25	0.91
N 3	3.17	1.14	3.20	1.06	2.83	1.05	3.70	0.65	2.33	1.24	3.13	1.10
N 2	3.57	0.84	3.43	0.945	2.96	1.18	3.91	0.28	2.65	1.11	3.26	1.01
N 1	3.71	0.90	3.95	0.21	3.81	0.40	3.86	0.47	2.67	1.31	3.76	0.53
日本人	3.85	0.46	3.96	0.19	4.00	0	3.88	0.58	3.92	0.27	3.62	0.98

日本語学習者のデータについて、2要因（日本語レベル×状態変化動詞（咲く、閉まる、壊れる、着る、始まる、積もる））の分散分析を行った結果、日本語レベル ($F [3, 540] = 12.877, p < .01$) と状態変化動詞 ($F [5, 540] = 17.801, p < .01$) は1%水準で有意であった。交互作用は有意ではなかった。状態変化動詞について、テューキーのHSD検定による多重比較を行ったところ、「始まる」は1%水準で他の5つの動詞よりも有意に低くなっていた。また、「着る」は1%水準で「壊れる」より、5%水準で「閉まる」より有意に高かった。他の動詞の間には有意差は見られなかった。

以上、状態変化動詞の使用において、日本語レベルによる差があり、「始まる」の得点が他の動詞より有意に最も低くなっていることが分かった。

4. 3 位置変化動詞における動詞別の比較

位置変化動詞の動詞別得点は表6にまとめた。2要因（日本語レベル×位置変化動詞（倒れる、落ちる、行く、来る、浮かぶ、上がる））の分散分析を行った結果、日本語レベル ($F [3, 558] = 6.840, p < .01$) と位置変化動詞 ($F [5, 558] = 26.642, p < .01$) は1%水準で有意であった。交互作用は有意ではなかった。位置変化動詞について、テューキーのHSD検定による多重比較を行ったところ、「行く」は他の5つの動詞よりも、5%水準で有意に低くなっていた。一方、「浮かぶ」は1%水準で「倒れる」を除き、他の4つの動詞より有意に高くなっていた。また、「落ちる」と「来る」は「倒れる」よりも5%水準で有意に低かった。他の動詞間には有意差は見られなかった。

表6：位置変化動詞における動詞別得点

	倒れる		落ちる		行く		来る		浮かぶ		上がる	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
N 4	3.14	1.23	2.71	1.24	1.93	1.18	2.68	1.15	3.46	0.79	2.79	1.16
N 3	2.83	1.22	2.14	1.18	1.69	0.96	2.45	1.18	3.55	0.73	2.69	1.19
N 2	3.40	0.86	2.56	1.35	2.08	1.22	2.36	1.03	3.24	1.09	3.00	1.11
N 1	3.73	0.59	3.07	1.38	2.20	1.42	3.13	1.06	3.80	0.56	2.93	1.33
日本人	3.96	0.20	3.96	0.20	4.00	0	3.79	0.41	3.96	0.20	4.00	0

また、アスペクト的なものは意志性の有無というムード的なものと関係していると工藤（1995）が指摘している。そこで、学習者による位置変化動詞の使用について、「意志／無意志」という動詞の種類の変因と日本語レベルの変因で、2変因（意志／無意志動詞×日本語レベル）の分散分析を行った。その結果、意志／無意志動詞（ $F [1, 574] = 11.787, p < .01$ ）と日本語レベル（ $F [3, 574] = 4.212, p < .01$ ）には1%水準で有意差が見られた。交互作用は有意ではなかった。日本語レベルについて、LSD検定による多重比較を行ったところ、N1はN2、N3、N4との間で5%水準で有意差があった。その他のレベル間には有意差がなかった。

以上、位置変化動詞の使用において、意志性の有無という動詞の性質による影響があり、日本語レベルがN1に上昇に従い、上達することが確認された。また、動詞別の難易度について、無意志的な動詞である「浮かぶ」が最も高得点で、意志的な動詞である「行く」の得点が最も低くなっていることが分かった。

5. 考察

5.1 状態変化動詞と位置変化動詞の得点の比較

文法性判断テストの日本語レベル別に動詞の種類別の得点を比較した結果、状態変化動詞より位置変化動詞の平均値のほうが有意に低くなっていることが確認された。また、シテイル項目の「◎」の選択率をグループごとに比較した結果、日本語母語話者を除き、各レベルでは状態変化動詞と位置変化動詞の数値に開きがあり、習得の初期から位置変化動詞の選択率が低かったことが確認された。この結果から、学習者が結果の状態のシテイルを使用する時に、結びつく主体変化動詞が「状態変化」なのか、「位置変化」なのかという学習者独自の運用規則が影響を与えている可能性が示唆された。

こうした運用規則について、位置変化動詞と状態変化動詞の意味特徴に起因する可能性がある。上述したように、「位置変化動詞+ている」は主体の存在位置の変化結果を表すことで、「状態変化動詞+ている」に比べ、時間的な性質のほか、空間的な性質も併せ持つ（簡2012）。このように、位置変化動詞が習得しにくくなり、選択率が低かったと考えられる。

第2の可能性は教科書からの影響である。多くの日本語教科書では、「死ぬ」や「咲く」などの状態変化動詞のほうが先に提示される。先に提示されたものが習得初期の段階から教材や先生からのインプットの頻度が高いと予測され、その結果、早い段階から使用されると推測される（Shirai 2002）。

5.2 状態変化動詞と位置変化動詞における動詞別の比較

日本語学習者による状態変化動詞の得点を検討した結果、日本語レベルが上昇に従い、得点が高くなる傾向が観察された。また、「始まる」の得点が他の動詞よりも有意に低くなっていた。「始まる」において、どの語形が選択されていたか、日本語母語話者の使用も含め、表7にまとめた。

表7：「始まる」の選択語形の得点

	ル		タ		シテイル	
	M	SD	M	SD	M	SD
N 4	2.75	1.25	2.90	1.16	2.20	1.10
N 3	2.60	1.13	3.00	1.11	2.33	1.24
N 2	2.70	1.10	3.61	0.58	2.65	1.11
N 1	2.71	1.18	3.52	0.98	2.67	1.31
日本人	1.92	1.19	3.62	0.85	3.92	0.27

表7から、日本語母語話者の選択では、シテイルとタの両語形において、それぞれ3.92と3.62と高得点であったのに対して、日本語学習者の選択では、どのレベルの学習者においても、タの得点がシテイルのより高くなっていることが分かった。このことは従来アスペクト仮説でも指摘されている変化動詞（Andersen & Shirai (1994) の用語は「到達動詞」）はタとの結びつきが強く、シテイルとの結びつきが弱いことを示していると言える。

また、日本語学習者による位置変化動詞の得点を検討した結果、他の動詞よりも得点が有意に低くなっているのが「落ちる」、「行く」、「来る」であった。この3つの動詞でどの語形が選択されていたか、日本語母語話者の使用も含め、表8にまとめた。表8から、「落ちる」と「行く」の2つの動詞で、日本語母語話者では、シテイルの得点が高かった。一方、日本語学習者では、どのレベルの学習者においても、タの得点がシテイルより高くなっていることが分かった。そして、「来る」で、日本語母語話者では、ル、タとシテイルの3つの語形において、それぞれ3.88、3.46、3.79と高得点であった。一方、日本語学習者では、最初にルと結びつけられ、日本語レベルの上昇につれ、タ、シテイルの順で使用されるようになってきたことが観察された。この結果は、上述した状態変化動詞「始まる」の使用傾向と同様、変化動詞はタとの結びつきが強いというアスペクト仮説（Andersen & Shirai 1994）の主張に沿っていると言える。

表8：「落ちる」、「行く」、「来る」の選択語形

		落ちる			行く			来る		
		ル	タ	シテイル	ル	タ	シテイル	ル	タ	シテイル
N 4	M	1.82	3.61	2.77	1.50	3.54	1.95	3.25	2.43	2.68
	SD	1.21	0.78	1.24	1.03	0.99	1.13	1.07	1.20	1.15
N 3	M	1.79	3.62	2.29	1.69	3.38	1.69	2.86	2.83	2.45
	SD	1.11	0.77	1.19	1.19	0.82	0.96	1.15	0.82	1.18
N 2	M	1.84	3.48	2.56	1.88	3.60	2.08	3.16	3.12	2.36
	SD	1.21	0.91	1.35	1.05	0.57	1.22	1.10	0.97	1.03
N 1	M	1.60	3.53	3.07	1.20	3.20	2.20	3.00	3.13	3.13
	SD	0.82	0.91	1.38	0.41	1.14	1.42	1.00	1.06	1.06
日本人	M	2.08	2.92	3.96	1.00	2.17	4.00	3.88	3.46	3.79
	SD	1.13	1.21	0.20	0	1.40	0	0.62	1.02	0.41

5. 3 位置変化動詞と意志性

位置変化動詞における動詞別の得点と意志性の関わりについて検定を行った結果、日本語学習者の使用には意志性の有無という動詞の性質による影響があることが確認された。そして、得点が他の動詞より最も有意に高くなっている動詞は無意志的な動詞である「浮かぶ」であった。得点が最も有意に低くなっている動詞（「落ちる」、「行く」、「来る」）に、意志性の持つ動詞は3つのうち2つ（「行く」、「来る」）があった。このことから、位置変化動詞の意志性が「行く」と「来る」の2つの動詞の低得点につながった可能性がある。

主体変化動詞は主体の観点から変化を捉えているものである。「死ぬ」、「溶ける」、「積もる」のような無意志的な主体変化動詞は変化のみを捉えており、シテイルと結びつき、変化結果の継続性を表している。それに対して、「行く」、「来る」のような人の動作によってもたらされる変化を捉えている主体変化動詞は、シテイルと結びつき、結果状態を能動的・意志的に維持することも表している（工藤1995）。このように、「結果の状態」用法のシテイルを習得する初期には、変化のみを捉えている無意志的な主体変化動詞から習得が進むと推測される。

しかしながら、今回のデータでは全ての意志的な位置変化動詞の得点が低いわけではなく、「倒れる」の得点はN 3を除き、すべて3点を超えている。意志的な主体変化動詞に習得しやすいものとそうではないものがあると考えられる。今回の調査文では、主体変化動詞に無意志的な動詞も含んでいるため、意志的な位置変化動詞の習得については、別途分析を行い、検討していきたい。

6. 結論

本稿では、「結果の状態」のシテイルの習得に状態変化と位置変化という主体変化動詞の意味特徴による影響があるかどうかについて、中国語母語話者を対象に、文法性判断テストを用いて検証を行った。調査の結果から次のことが明らかになった。

まず、各日本語レベルの学習者の使用において、位置変化動詞は状態変化動詞より得点が低くなっており、動詞の種類による選択率の偏りがあり、更に、習得過程にU字型を描くという「U字型発達曲線」（Kellerman 1985）の傾向が観察された。

次に、学習者による動詞の語形選択について、タの選択がシテイルより多くなっており、主体変化動詞はタとの結びつきが強いことが見られた。

そして、学習者による位置変化動詞の使用において、意志性の有無という動詞の性質による影響があることが観察された。

以上の結果から、学習者が「結果の状態」用法のシテイルを使用する時に、主体変化動詞が「状態変化」であるか「位置変化」であるかという学習者独自の運用規則が習得に影響を与えている可能性があると考えられる。こうした運用規則は主体変化動詞の意味特徴、教材や教師からの影響とインプットの頻度により形成されてきた可能性があると推測される。

また、今回のデータからも意志性という位置変化動詞の性質が習得に影響を与える要因の1つであることが示唆された。今後は位置変化動詞のみならず、状態変化動詞を含めて、より数多くの動

詞を調査対象として、検討していきたい。

注

- 1 変化動詞には主体変化動詞と客体変化動詞がある。本稿は主体変化動詞のみに焦点を当て、客体変化動詞に関する課題は別稿に譲りたい。
- 2 過剰使用パターン「ル→誤用のテイル」は、「る」を使用すべき箇所に、「ている」を使用した誤用である。非使用のパターン「誤用のル」は、「ている」を使用すべき箇所に、「る」を使用した誤用である。過剰使用のパターン「テクル→誤用のテイル」は、「てくる」を使用すべき箇所に、「ている」を使用した誤用である。非使用のパターン「誤用のタ」は、「ている」を使用すべき箇所に、「た」を使用した誤用である。

参考文献

- Andersen, R.W. & Shirai, Y. (1994) Discourse motivations for some cognitive acquisition principles. *Studies in Second Language Acquisition*, 16:133-156.
- Kellerman, E. (1985) If at first you do succeed. In S. Gass & C. Madden (Eds.), *Input in Second Language Acquisition*. 345-353. Rowley, MA; Newbury House.
- Shirai, Y. (2002) The aspect hypothesis in SLA and the acquisition of Japanese. *Acquisition of Japanese as a Second Language*, 5:42-61.
- Sugaya, N., & Shirai, Y. (2007) The acquisition of progressive and resultative meanings of the imperfective aspect marker by L 2 learners of Japanese: Transfer, universals, or multiple factors? *Studies in Second Language Acquisition*, 29: 1-38
- 庵功雄 (2010) 「アスペクトをめぐる」『中国語話者の日本語教育研究』 1:41-48.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版.
- 影山太郎 (2001) 『日英対照動詞の意味と構文』大修館.
- 川野靖子 (2003) 「位置変化動詞と結果の副詞句」『筑波日本語研究』 8: 39-48.
- 簡卉雯 (2012) 「動詞の意味特徴からみる「ている」の「結果の状態」用法の習得—縦断的事例研究—」『日本語 / 日本語教育研究』 3:245-259.
- 許夏珮 (2005) 『日本語学習者によるアスペクトの習得』くろしお出版.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』 15.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房.
- 工藤真由美 (2002) 「文法化とアスペクト・テンス」『シリーズ言語科学 5 日本語学と言語教育』 71-92. 東京大学出版会.
- 黒野敦子 (1995) 「初級日本語学習者における「-ている」の習得について」『日本語教育』 87:153-164.
- 小山悟 (2004) 「日本語のテンス・アスペクトの習得における普遍性と個性—母語の役割と影響を中心に—」『小山悟・大友可能子・野原美和子 (編) 言語と教育』 415-436. くろしお出版.
- 塩川絵里子 (2007) 「日本語学習者によるアスペクト形式「テイル」の習得—文末と連体修飾節との関係を中心に—」『日本語教育』 134:100-109.
- 菅谷奈津恵 (2004) 「文法テストによる日本語学習者のアスペクト習得研究—L1の役割の検討」『日本語教育』 123:56-65.
- 陳昭心 (2009) 「「ある／いる」の「類義表現」としての「結果の状態のテイル」」『世界の日本語教育』 19: 1-15.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 西由美子・白井恭弘 (2004) 「会話における『ている』の意味：アスペクト二構成要素理論による分析」南雅

- 彦・アラム佐々木幸子（編）『言語学と日本語教育Ⅲ』231-249. くろしお出版.
- 吉川武時（1971）「現代日本語動詞のアスペクトの研究」（金田一春彦編（1976）『日本語動詞のアスペクト』155-327. むぎ書房.）
- 鷺尾龍一・三原健一（1997）『日英語比較選書7 ヴォイスとアスペクト』研究社.